

「ロキ・コムーネス」の展開

—— エラスムス *vs.* メランヒトン ——

山 本 佳 生

はじめに

十五世紀後半のわずか四十年ほどのあいだに、ルドルフ・アグリコラは次の世紀にとって決定的な影響を与える著作を遺した。その成果はいずれも——残念ながら——彼の死後に花開くことになるのだが、イタリア^{クアトロチェント}の1400年代における「人文科学 *studia humanitatis*」を吸収し、その成果を十六世紀人文主義へと受け渡すという重要な役目をアグリコラは果たしたといえる。とりわけ、彼が目指していたのは中世の論理学との決別、そして弁証術（ディアレクティック）の復権であった。中世のスコラ論理学においては、すでに証明済みの命題、いわば必然的な前提を積み重ねていく証明が主であったが、アグリコラはそこに推論を再導入した。あらゆる前提は蓋然的であり、推論によってそれらを論証することが必要である。この手続きこそが弁証術（ディアレクティック）であると主張した。弁証術は論証の普遍性を確認する、判断する（*judicio*）ことではなく、論証自体を見つけ出す、発想する（*inventio*）ことを求める。その際に役に立つのが「ロクス」である。キケロやボエティウスによる意味付けや理解を継承しつつ、アグリコラにおいてそれらはより一般的で現実的なものへ変化する。つまり弁証術の専門用語としての「論拠 *loci argumentorum*」が一般性を獲得することで、「共通の見出し語 *capita communia*」という意味へ拡張するのだ⁽¹⁾。これが十六世紀においては、「ロキ・コムーネス」——優れた文章、記憶に値する範例などの情報を収納した——汎用的な「場所」、すなわち見出し語へと変貌を遂げる。

(1) この意味の拡張については別のところで論じた（拙論「発想の『場所』から引用の集成へ」、*Waseda Rilas Journal*, n° 9, 2021, pp.221-232）。見出し語の例としてアグリコラは次のように述べている。*De formando studio*, in *Lucubrationes aliquot*, éd. Alardus d'Amsterdam, Cologne, J. Gymnicus, 1539, p. 198, « Horum unum est, ut certa quædam rerum capita habeamus, cuiusmodi sunt virtus, vitium, vita, mors, doctrina, ineruditio, benivolentia, odium et reliqua id genus, quorum usus fere communis ad omnia et tanquam publicus sit. » 「まず第一に、事柄についての見出し語を準備すべきである。それらは徳、悪徳、生、死、学識、無知、好意、嫌悪といったものである。またあらゆる主題に適応可能な、いわば一般的な同種の見出し語も用意すべきであろう」。また仏語訳として次も参照。*Écrits sur la dialectique et l'humanisme*, trad. et éd. Marc van der Poel, Paris, Classique Garniers, 2018, pp. 300-301. エラスムス、メランヒトンとの関係については次で扱われている。Peter Mack, *Renaissance Argument : Valla and Agricola in the traditions of rhetoric and dialectic*, Leiden, Brill, 1993, pp. 303-314 (Erasmus) ; pp. 320-333 (Melanchthon).

ところで十六世紀に流行した、主題別の見出し語がついた引用の集成、いわゆる「コモンプレイスブック」はこうした「ロキ・コムーネス」をより物質的な形式で表現したものであるといえる。それについて論じる前に、我々はまず「ロキ・コムーネス」の意義と機能について考察しなければならないだろう。

「ロキ・コムーネス」は実際のところ、現実的かつ歴史的な必要性と深く関係している。それはルネサンスを特徴づける次の三つ(i)ラテン語の外国語化、(ii)既存の体系(学問や宗教)の見直しと再構築、(iii)印刷術の発展と古典テキストの再発見による情報量の増大、である。

まず(i)ラテン語の外国語化についていえば、この時代、基本的にラテン語は母語ではなく成長してから学ぶものであった⁽²⁾。修道院、学校、家庭どこであれラテン語を教えること、そして学ぶことが教育の基礎として考えられていた。それゆえラテン語の読み書きができるようになるための教科書やすぐれたラテン語の文章の用例集などの需要は必然的に高まった⁽³⁾。こうした条件のもと、ラテン語教育に「ロキ・コムーネス」の概念が導入され、その後の「コモンプレイスブック」もまた教育の需要に応えることになる。

次に(ii)既存の体系(学問や宗教)の見直しと再構築について。ルネサンスと宗教改革は切り離して考えることはできない。同様に中世的な大学教育への批判も無関係ではない⁽⁴⁾。フィリップ・メランヒトンがアグリコラの弁証術における「ロキ・コムーネス」の再定義を受けてさらにそれを深化させ、神学をはじめとする学問全般にも適用しようと試みた。「ロキ・コムーネス」すなわち見出し語は単なる引用の貯蔵庫ではなく、神が創造したこの世界の理解を助けるものとして機能するようになる。

(iii)印刷術の発展と古典テキストの再発見による情報量の増大にともなって、収集された膨大な量の情報をどのように管理するかが人文主義者たちにとって問題となった⁽⁵⁾。必要な情報に素早くアクセスするためのツールとして「ロキ・コムーネス」の概念が用いられた。それと同時

(2) この例外としてモンテーニュを挙げることができる。彼は乳児の頃からドイツ人家庭教師のもとでラテン語を母語として育てられている。Cf. *Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, 1 vol., Paris, Gallimard, 2007, I, 25, p. 180. しかしながら、こうした例外的教育を受けたのはミシェル一人ではなく、彼の兄弟トマとピエールも同様に育てられたようだ。これについては Michel Simonin, « Montaigne et ses frères : un poème inédit de George Buchanan conservé par Henri de Mesme », dans *L'Encre et la lumière*, Genève, Droz, 2004, pp. 489-507.

(3) こうした潮流を生み出した契機にロレンツォ・ヴァッラの『ラテン語の典雅について *Elegantiae*』が挙げられる。ルネサンス期のレトリックとディアレクティックにおけるヴァッラの位置づけについては P. Mack, *op. cit.*, pp. 22-36.

(4) 代表的なのがペトルス・ラムスであろう。ラムスは「ロキ・コムーネス」の方法論をプロテスタント教育に導入したヨハン・シュトゥルム (Johann Sturm, 1507-89) がパリで教鞭をとっていたときの生徒の一人として知られる。Ong, Bruyère, Meerhoff をはじめとして優れた研究が多くなされているが、我々の観点と関係するのは K. Meerhoff, « Logic and Eloquence : A Ramusian Revolution? », in *Argumentation*, vol. 5, n° 4, 1991, pp. 357-374 であり、これはラムスの「改革」が、まったく新しいものというよりも、やはりアグリコラとメランヒトンの潮流に位置付けられることを示したものだ。

に、メランヒトンの世界の理解という欲望と情報管理という現実的な需要が会うことで次第に百科全書の様相を帯びるようになる。

したがって、以下ではエラスムス、メランヒトンという一時代を築いた二人の人文主義者の著作を見ながら、「ロキ・コムーネス」の理念と二人のあいだの見解の相違点を確認し、「ロキ・コムーネス」が理論として練り上げられていく様を見ていきたい⁽⁶⁾。

1. エラスムス (1466-1536)

アグリコラの『弁証術（ディアレクティック）の発想について *De inventione dialectica*』に先駆けること三年、1512年にエラスムスは『言葉と事柄の豊かさについて *De copia duplici verborum ac rerum*』を発表する。この著作は教科書的な作品ではあるが、正確かつ豊かにラテン語を操ることというエラスムスのレトリックに対する基本姿勢が明確にあらわれてもいる。前年の1511年には『学習計画 *De ratione studii*』を出版しており、そこでも同様にレトリック教育について論じられている。したがって我々はまず後者の作品からエラスムスの目指す教育について知り、その次に彼のいう「豊かさ *copia*」がどのようなものなのか考察していくことにしたい。

『学習計画』においてラテン語の正確性と豊かさを手に入れる方法として語られるのが、読書とそれに伴うノートの取り方である。人の心を打つ言葉や精妙な表現、注目に値する範例などを記憶するため、読書の際にはそれらに注意し、その際後から見たときにすぐにわかるように印をつけておくのが有益である。また様々な印を用いるだけでなく、内容がすぐわかるような体系的なものも用いるべきだとエラスムスは述べる⁽⁷⁾。このように注意深く読書することによって内容が記憶に定着しやすくなるうえ、印を付けた箇所を書き写すことで作られたノートは「読書の貯蔵庫 *lectionis thesaurus*」として言語表現と事例が蓄えられた「場所」となる。実際、こうしたノートは生徒にとってよりも教師にとってより有用である。というのも、エラスムスにとって

(5) これについては Ann Blair, *Too much to know. Managing scholarly information before the Modern Age*, New Haven, Yale University Press, 2010.

(6) 本稿では一貫して「ロキ・コムーネス」に決定的な訳語を与えることは避ける。というのも、この語は使う者次第で異なる意味や解釈を示し、時代によっても使い方がちがうからである。注意を促しておきたいのは、これらに俗語があてられた場合に（英語の *commonplace* や仏語 *le(s) lieu(x) commun(s)* など）現代的な「常套句、決まり文句」という意味を読み込むのは間違いであるということだ。訳語をつけるとしても、その語がどの時代のどの思想潮流に属する人間によって発せられたかを考えることが必要である。また本稿では「コモンプレイスブック」という言葉も使用しているが、これは主題別の見出しが付いた引用句の集成を表す適切な日本語が存在しないがゆえであり、また最近出たアン・ブレア『情報爆発』住本規子他訳、中央公論新社、2018年においても「コモンプレイスブック」と表記されているからである。

(7) Érasme, *De ratione studii*, ASD I-2, pp. 117-118, « His itaque rebus instructus, inter legendum auctores non oscitanter observabis, si quod incidat insigne verbum, si quid antique aut noue dictum, si quod argumentum aut inuentum acute aut totrtumapte, si quod egregium orationes decus, si quod adgium, si quod exemplum, si qua sententia digna quae memoriae commendetur. Isque locus erit apta notula quapiam insigniendus. Notis autem non solum variis erit vtendum, verum etiam accomodatis, quo protinus quid rei sit admoneant ».

重要なのは、ラテン語作文のために教師が生徒に題材や表現のモデルを上手く与えることだからだ。それゆえ教師の方こそがすぐれた文章や範例をノートに集めておいて、それぞれの生徒の実力に合わせて論題を提供したり、模範となる文章を示したりしなければならない⁽⁸⁾。この際に重要とされるのが「多彩さ *varietas*」である。様々な表現を組み合わせたり、同一の題材を色々な文体で論じたりする練習を生徒にさせることで、生徒は言語表現の多彩さを手に入れることができる。

この姿勢は『言葉と事柄の豊かさについて』においても引き継がれる。「多彩さ *varietas*」はさらに強調されて、「言論の豊かさとは多彩さの方法である *copia orationis variandae ratio*」と定義される。この著作の第一巻は「言葉の豊かさ *copia verborum*」にあてられており、言葉の言い換えによる表現の多様さを手に入れることが目指されている⁽⁹⁾。具体的には、一つの文章の言い換えやギリシャ語からラテン語への翻訳、韻文から散文に書き変えや、その逆などの練習を行なうなどである。そして最良の作家であるキケロやアウルス・ゲッリウス、アブレイウスなどを読み、暗記し、模倣すること、またそれによって即興的に彼らの文章を使いこなせるようにすることが述べられている。また語彙を豊かにするために、同義語の使用や人称、時制などの転用、普通名詞を固有名詞で言う、あるいはその反対、転喩、換喩、提喩などの方法が紹介される。これらを駆使することで一つの文章を何通りにも変奏することが可能になり、言語表現の豊かさが実現する。

次の第二巻では「事柄の豊かさ *copia rerum*」について論じられる。エラスムスは事柄つまり「話題」を展開し、増幅させる十一の方法を呈示する。最初の四つは、話題の分割、類比原因にまでさかのぼること、出来事とその関連事項を積み重ねることなど、文章を展開することが主として目指されている。ほかには、細かい部分の描写を行なったり、脱線を挟む、大げさに語るなどの方法が挙げられる。注目すべきは、最後に挙げられている「ロキ・コムーンネス」と「範例 *exempla*」の方法である。実際、「事柄の豊かさ」は説得力の増強のために様々な事例を呈示することによって実現される。したがって「事柄の豊かさ *copia rerum*」とは「範例の豊かさ *copia exemplorum*」にほかならない。だが、問題となるのはどのようにして多くの事例、要するに「範例 *exempla*」のストックを蓄えるかである。「ロキ・コムーンネス」はまさしくこのストックの増強のための方法である。

まずはあらゆる分野の著者を読むことから始まる。次に用意しておいたノートに「見出し語」

(8) *Ibid.*, p. 129, « Ergo præceptor, quem oportet assidue in bonis auctoribus obuersari, huiusmodi ceu flosculos vndique colliget eosque delectos proponet, aut etiam in eam formam demutabit, vt puerorum ingeniis sint accomodati ».

(9) 以下「言葉の豊かさ」については J. Chomarat, *Grammaire et rhétorique chez Érasme*, 2 vols, Paris, Les Belles Lettres, 1981, pp. 712-736 ; 「事柄の豊かさ」については pp. 736-761 を主に参照した。

あるいは「タイトル」をページに書き込む。この際の「見出し語」や「タイトル」は「ロクス」と呼ばれており、その配列方法が重要である。エラスムスの記述を見てみよう。

したがって、あらゆる種類の著者を読もうとする者は、まずはじめにできるかぎり多くの「ロクス」を備えることになるだろう。その「ロクス」の一部は美德と悪徳にかんするカテゴリーとその下位区分から、また他の部分は人間にかんする事柄や、ほとんど忠告として受け入れられているものから取り出される。さらにその「ロクス」は類似と対立によって配列される。というのも、お互いに関連しているのが認められる「ロクス」は次に何が続くか想起させるからであり、また記憶は対立によって同じように想起されるからだ⁽¹⁰⁾。

(Ergo qui destinavit per omne genus autorum lectione grassari [...] prius sibi quam plurimos comparabit locos. Eos sumet partim a generibus ac partibus vitiorum virtutumque, partim ab his quæ sunt in rebus mortalium præcipua, quæque frequentissime solent in suadendo incidere. Eaque conveniet iuxta rationem affinitatis et pugnantiae digerere ; nam et quæ inter se cognata sunt ultro admonent quid consequatur, et contrariorum eadem est memoria).

「ロクス」はどんなものでもいいわけではなく、モラルにかんするものであること、そしてその並べ方も任意ではなく類似と対立という規則性によって決定される。類似は相互参照のように似たテーマを探すのに役立ち、対立は一つの組として記憶に残りやすい。たとえば、見出し語の例として「敬虔さ pietas」を挙げるとすると、次にくるのはその対立である「不敬虔さ impietas」である。また「敬虔さ」の下位区分として枝分かかれた先には「神に対するもの in Deum」, 「祖国に対するもの in patriam」が続き、後者からは「親に対するもの in parentes」, 「子供に対するもの in liberos」というようにさらに区分できる。また「神に対する不敬虔さ」の類似として「迷信 superstitio」という見出し語を置くことも可能である。こうした一つの見出し語から下位区分を増やし、類似や対立によって関連する見出し語を並べていくことによって、「事柄 res」を蓄える「場所 (ロクス)」を準備するのだ⁽¹¹⁾。また、この「ロクス」は物事の善悪に関わる範例の場合もあれば、弁論の予備訓練、プロギュムナスマタで見られる一般的な論題（たとえば「結婚すべきか否か」、「君主制か民主制か」など）の場合もある⁽¹²⁾。こうした見出し語のテーマの範囲を拡張することでエラスムスはそこに配列される事柄の多様さを保証している。

つづいてはこの「ロクス」に読書から得たものを配列しなければならない。エラスムスにおけ

(10) Érasme, *De copia*, ASD I-6, p. 258.

(11) この分岐法の図解は Chomarat, *op. cit.*, p. 753にある。

る「ロキ・コムーネス」の真の意味はここにある。

したがって、十分な数の見出し *titulus* を備え、それらを望む順に配列し、そこから一つ一つ下位区分に分け、その下位区分に「ロキ・コムーネス」すなわち格言風の短文を追加するとよい。それがいかなる著者のところで出会ったものであろうとも、目立つところがありさえすればすぐさまその「ロクス」に書き込むべきだ。あるいは寓話、物語、範例、新奇な事例でもよいし、格言風の短文や面白く人を驚かすような言葉、ことわざ、メタファー、たとえ話でもよい。そうすることで、精神に読んだものが深く刻み込まれると同時に、読んだ作品を活用する習慣ができる。(中略) それゆえどんな場合でも、望むときに探し出せるような、よく整理された鳩箱のように、言葉の素材が手元になければならない⁽¹²⁾。

(Ergo posteaquam tibi titulos compararis quot erunt satis, eosque in ordinem quem voles digesseris, deinde singulis suas partes subieceris, rursum partibus addideris locos communes siue sententias, iam quicquid vsquam obuium erit in vllis autoribus, præcipue si sit insignius, mox suo loco annotabis; siue erit fabula, siue apologus, siue exemplum, siue casus novus, siue sententia, siue lepide aut alioqui mire dicutum, siue paroemia, siue metaphora, aut parabola. Atque ad eum modum pariter fiet vt et altius insideant animo quæ legeris, et adsuescas vti lectionis operibus. [...] Postremo vtcunque postulat occasio, ad manum erit dicendi supellex, certis veluti nidis constitutis, vnde quæ voles petas).

我々はすでに、ルネサンス期における「ロキ・コムーネス」は見出し語の意味だと主張してきたが、エラスムスにあっては「ロクス」(見出し語)に「ロキ・コムーネス」(引用文)が配列される。つまり「ロキ・コムーネス」は論拠でも論法でもなく、文章それ自体ないしは内容そのものを指すのだ (*loci communes siue sententia*)。

このように見出しあるいは「ロクス」の設定と下位区分への派生、そして「ロキ・コムーネス」や範例の配列によって「事柄の豊かさ」は実現される。それと同時にこれは「言葉の豊かさ」も生み出す。というのも、「ロクス」に配列されるあらゆる事柄は文章表現の形で表されるからだ。範例といえども結局は文章にほかならず、それゆえ事柄について多くを知っていることは、すな

(12) *Ibid.*, p. 755 ; Ann Moss, *Printed commonplace-books and the structuring of Renaissance thought*, Oxford, Clarendon Press, 1996, p. 110. 厳密に言えば、プロギュムナスマタの「一般的な論題」のギリシャ語は « *thesis* (θέσις) » であり、「ロキ・コムーネス」という言葉に直接対応する « *koinos topos* (κοινὸς τόπος) » とは区別される。後者は「汎用の論法」として、命題や文章というよりもむしろ悪徳を非難する論じ方を教えるものである。とはいえ、キケロ『発想論』にさかのぼれば、「一般的な論題」も「確証されていない事柄の拡充 *dubiae rei amplificatio*」として「ロキ・コムーネス」と呼ぶことができる。

(13) Érasme, *De copia*, ASD I-6, pp. 260-261.

わち多くの文章表現を備えていることを意味するのだ。ここで著作のタイトルである「言葉と事柄の豊かさ *copia duplici verborum ac rerum*」が実現する⁽¹⁴⁾。「こうして蜜蜂のように熱心に飛び回り、あらゆる著者からその蜜を集めた者は、自分の巣へ持ち帰る。そしてその蜜はあまりに豊かなので、すべてを集めきることはできない。それゆえ、特に重要なものを選び、自分の文章に適合させなくてはならない」⁽¹⁵⁾とエラスムスは忠告する。この方法はラテン語教育にとってはきわめて有益かつ実践的である。しかしながら——彼が凡庸な作家でないのを裏付けるように——彼自身はいわゆるコモンプレイスブックを作りはしなかった。とはいえ、彼の示した言語表現と事例の「豊かさ *copia*」についての方法論はラテン語教育に不可欠なものとなり、大きな影響力を持ったことは間違いない⁽¹⁶⁾。

2. メランヒトン (1497-1560)

1531年に発表された『ロキ・コムーネスの方法 *De locis communibus ratio*』は表題のとおり「ロキ・コムーネス」についての考え方を示した四ページ足らずの文書であるが、これは1519年にはじめはヴィッテンベルクで、次いですぐにバーゼルにおいて出版された『弁論術（レトリック）三卷 *De rhetorica libri tres*』の「ロキ・コムーネス」についての部分を抜粋したものだ。これがアグリコラやエラスムスの「ロキ・コムーネス」やレトリック全般に関する抜粋と合本の形でまとめられて出版されているように⁽¹⁷⁾、この三人がルネサンス期の「ロキ・コムーネス」理解の基礎を築いたといえるだろう。メランヒトンは他の二人の思想を受け継ぎ、そこから発展させようとしている⁽¹⁸⁾。

メランヒトンが説明するところによると、哲学者たちは人間にかんするあらゆる事柄（*res humanæ*）をいくつかの「見出し語 *capita*」に分類した（たとえば生、死、富、名声、徳、悪徳など）。こうしたやり方は哲学のみならず他の分野にも適用でき、それゆえ神学においても信仰や儀式、罰などの見出し語を作り出すことができる。したがって、人間にかんする事柄についての正確な判断を得ようと思うならば、こうした一連の「見出し語」を参照するのがよい。という

(14) Ann Moss, *op. cit.*, p. 112.

(15) Érasme, *De copia*, ASD I-6, p. 262, « Itaque studiosus ille velut apicula diligens per omnes autorum hortos volitabit, flosculis omnibus adsultabit, vndique succi nonnihil colligens quod in suum deferat aluearium. Et quoniam tanta est in his rerum foecunditas vt omnia decerpi non possint, certe praecipua deliget et ad operis sui structuram accommodabit ».

(16) エラスムスの「ロキ・コムーネス」やそこから派生した教育メソッドの広まりと浸透については1525-35年（推定）のフランドルの学生のノートからも明らかである。このノートの詳細な分析と考察については Jean-Claude Margolin, Jan Pendergrass et Marc Van der Poel, *Images et lieux de mémoire d'un étudiant du XVI^e siècle. Étude, transcription et commentaire d'un cahier de latin d'un étudiant néerlandais*, Paris, Guy Trédaniel Éditeur, 1991. 特に「ロキ・コムーネス」の方法については Introduction, pp. LXVI-LXXIV.

(17) *De formando studio, Rogolphi Agricolaë, Eras. Roterod. et Philippi Melancthonis, rationes, cum locorum quorundam indice*. Basileae excudebat Henricus Petrus, Mense Augusto, Anno M. D. XXXI.

のも、それはあらゆる事柄の形相であり規則を示しているからだ。したがって「ロキ・コムネス」は具体的な文章ではなく、むしろ現実の事柄に「共通するテーマ *communia themata*」, つまり人間に関する行為や事柄について論じる際や、知的な問題について考えるときに出てくる、一般的な特徴をあらわしているのだ⁽¹⁹⁾。ここではアグリコラの考えを受け継ぎながらメランヒトンがそれを発展させているのが見られる。

また、これらの一般的な見出し語は、物事を理解するうえで役に立つ。というのも、見出し語のなかは、単に文章や範例が並んでいるのではなく、定義、描写、よく考察された思想、寓話や歴史から取り出された範例が配列されているからだ⁽²⁰⁾。それらは互いに無関係ではなく、むしろ一種の論証を構成する。たとえば、見出し語が「正義」であれば、その定義が述べられ、その具体的描写が古典作家から引用される。また詩や神話からも適した描写があれば引用される。思想については著者がそれをどのように用いているかが重要である。というのも、その内容をよく理解していなければ、上手く利用することは難しいからだ。最後に範例が述べられ、「見出し語」は閉じられる。こうした情報を常に準備しておき、どんな論証であれ、「見出し語」をいくつか参照することで、言論の「豊かさ」を手にすることができだろうとメランヒトンは述べる⁽²¹⁾。

ところで、「ロキ・コムネスが何の意図もなく作られたらと思うてはならない。それらは自然の深層構造に由来し、あらゆる事物の形相もしくは規則のようなものだ⁽²²⁾」とメランヒトンは

(18) メランヒトンの「ロキ・コムネス」について古いものとしては次。Q. Breen, « The Terms "Locis Communes" and "Locis" in Melanchthon », in *Church History*, vol. 16, 1947, pp. 197-209. レトリックとディアレクティックに関しては次を見よ。K. Meerhoff, « Logique et création chez Philippe Melanchthon », in *Logique et Littérature à la Renaissance, Actes du colloque de la Baume-les-Aix, 16-18 septembre, 1991*, éd. M. L. Demonet et A. Tournon, Paris, H. Champion, 1994, pp. 51-68. またアグリコラとの関係については *id.*, « Melanchthon, lecteur d'Agricola : rhétorique et analyse textuelle », in *Bulletin de l'Association d'étude sur l'humanisme, la réforme et la renaissance*, n° 30, 1990, pp. 5-22. レトリック全体については *id.*, « The Significance of Philip Melanchthon's Rhetoric in the Renaissance », in *Renaissance Rhetoric*, ed. P. Mack, London, Macmillan, 1994, pp. 46-62.

(19) P. Melanchthon, *De locis communibus ratio*, in *Opera Quae Supersunt Omnia*, 28 vol., ed. Karl Gottlieb Bretschneider and Heinrich Ernst Bindseil (*Corpus Reformatorum: CR*), vol. xx, col. 695, « Philosophi digesserunt res humanæ omnes ceu in formas quasdam vivendi, ut alia sunt naturæ, ut vita, mors, forma; alia fortunæ, ut opes, natalium splendor, honores. Alia sunt in nostra potestate, ut vitia ac virtutes. Sic et in singulis studiorum generibus sunt quædam capita, in quæ referri solent, quæ tractantur illic, ut in Theologia, fides, ceremonia, peccatum; in iure æquitas, servitus, pœna, maleficium, iudex, advocatus, et his similia. Qui volet igitur de rebus humanis recte iudicare, illum oportet, quicquid inciderit forte fortuna, ad has ceu formas rerum exigere. [...] Voco igitur locos communes omnes omnium rerum agendarum, virtutum, vitiorum, aliorumque communium thematum communes formas, quæ fere in usum, variasque rerum humanarum ac literarum causas incidere possunt ».

(20) *Ibid.*, col. 697, « In singulos autem locos pertinent frutiones [*sic*: finitiones], descriptiones sententiæ, et exempla fabulosa, seu historica ».

(21) *Ibid.*, col. 698, « His qui instruxerit sese, habebit quod suppediet ad copiam semper in promptu, si quaecunque inciderit argumentum, in aliquem locorum communium pluresve referat [...] ».

注意を促す。「あらゆる事物の形相」とは上で見たような「類型（タイプ）」を意味し、その「規則 regulæ」とは合理性を意味する。そしてそれらが由来する、あるいは、そこから「類型」が抽出されるような「構造 sedes」はキケロやクインティリアヌスが言ったような「論証の在所 sedes argumentorum」とは異なる。F. Goyet が指摘するように、それらは現実世界の事柄を意味する。つまり、見出し語は現実もしくは自然を類型化した結果であり、その一覧表は自然の構造図をあらわすのだ⁽²³⁾。いわば、配列された「ロキ・コムーネス」は世界（人間に関するすべての事柄、行為）を表象するといっても過言ではない。したがって、現実世界の事柄が多様多様であるのに合わせて、「ロキ・コムーネス」すなわち見出し語も種類を増やす。「ロキ・コムーネス」として哲学や神学の見出し語だけでなく、より幅広い分野、政治や法律、戦争や経済などに関連したものも追加され、百科全書の様相を示すようになるだろう⁽²⁴⁾。

このような「ロキ・コムーネス」と、そこに集められる定義や描写、範例などの知識の総体は、読書と執筆という二つの目的に向けられる。哲学的論考も歴史記述も、それらが人間に関する一般的事柄である以上、共通のテーマつまり「ロキ・コムーネス」に還元することが可能だからだ。読書の際には、いわば解読格子としてこうした見出し語は役に立つ。他方で、執筆の際には次のことに注意を払うべきだろう。各見出し語は多様な学問分野の一般的なテーマを表しているの、そこに配列されている情報を知るだけで、その分野について詳しくなったかのように錯覚することがある。必要なのは、その背後にある体系的な知識の総体を学び理解することである。1531年の『弁論術（レトリック）の要素 *Elementa rhetorices*』はこうした「ロキ・コムーネス」と読書、執筆の関係について論じている。メランヒトンは「ロキ・コムーネス」を真の知識と勘違いしている者に対して次のような批判を投げかける。

様々な主題についてあちらこちらの詩人や弁論家から収集した短文の積み重ねを手にして、「ロキ・コムーネス」を手に入れたと考える人たちがいる。またこうした著名な言葉の積み重ねは完全な知であると判断しているので、読書の際に花を摘むときのように、何かしらの言葉を集めることしか考えていない。そうしているあいだ、彼らはいかなる学芸も完全に知ることはないし、どんな書物もきちんと全体を把握することはなく、また弁論を細かく精査することもない⁽²⁵⁾。

(Quidam putant se locos communes tenere, cum de variis rebus coacervatas sententias

(22) *Ibid.*, col. 698, « Neque vero putes eos [locos communes] temere confingi, ex intimis naturae sedibus eruti formae sunt seu regulæ omnium rerum ».

(23) F. Goyet, *Le sublime du "lieu commun"*, Paris, Champion, 1996, p. 555.

(24) この点についての考察は F. Goyet, « Encyclopédie et "lieux communs" », in *L'Encyclopédisme. Actes du colloque de Caen, 12-16 jan., 1987*, éd. Annie Becq, Paris, Klincksieck, 1991, pp. 493-504 を見よ。

(25) Melanchthon, *Elementa rhetorices*, in *CR*, vol. xiii, col. 452.

habent, quas passim ex poetis et oratoribus excerpterunt. Et quia iudicant hanc coacervationem insignium dictorum, perfectam esse doctrinam, nihil habent consilii in legendis autoribus, nisi ut inde tanquam flores, dicta quaedam decerpant. Interim nullam artem perfecte discunt, nullum scriptum totum intelligunt, nusquam totum orationis genus considerant).

エラスムスは「多彩さ」と「豊かさ」のために、とにかく文章表現と事柄のストックを増やすことを推奨したが、メランヒトンにとってはそれ以上に学問の根本的な理解、それによる「真理」の獲得が重要視されたといえるだろう⁽²⁶⁾。メランヒトンはエラスムス的「豊かさ」の価値を認めてもいるし、引用される文章における表現の美しさ、権威を要求するなど、「ロキ・コムーネス」の方法の修辞学的、文学的側面をおろそかにしているわけではない。しかしながら、彼にとって不可欠と思われるものは、学問体系とその秩序にほかならないのだ。ここで情報管理の主題が持ち上がる。エラスムスはこの点に関しては無頓着であった。それに対しメランヒトンにとっては、集めた情報の一貫性と明確な区分を維持する秩序体系が重要であり、これこそ、その後花開く「コモンプレイスブック」を特徴づけるものだ。

3. 「豊饒さ」の統御

エラスムスにとって「ロキ・コムーネス」は文章表現そのものを指し、それらを蓄えることによって言葉の「多彩さ *varietas*」を手に入れ、「豊かさ *copia*」を実現するものだった。それゆえ、見出し語を下位区分によって分岐させて、あとは各人が好きなように、アルファベット順でもなんでも並べればよい、というような態度である。「実際（そうした配列は）、それほど重要ではないのだ。私は下位区分に分けられたロキ・コムーネス、つまり格言風の短文のすべてを、精密であり煩瑣でもある細かなカテゴリーに配置することを望まないし、それらが普段使われる表現のなかで頻繁に現れるようなカテゴリーに入れるだけで十分だと思う⁽²⁷⁾」。このエラスムスの無頓着さは、まちがいにメランヒトンを苛立たせたことだろう。後者にとって「ロキ・コムーネス」は見出し語もしくはタイトルを指すが、そこで重要なのは、まぎれもなく体系の一貫性であるか

(26) *Ibid.*, col. 452-453, « Quare hæc diligentia colligendi sententias, non solum verborum copiam alit, sed nonnihil etiam ad rerum cognitionem conducit. Sed tamen ut copiose ac varie tractari loci communes possint, accedere oportet ex ipsis artibus perfectam doctrinam. » 「したがって、このように格言風の短文を熱心に集めることは、言葉の豊かさを養うのみならず、事柄の認識へと導くことにほかならない。とはいえ、多彩かつ豊かにロキ・コムーネスを扱うためには、その学問からもたらされる完全な教えに精通していなくてはならない」。

(27) Érasme, *De copia*, ASD I-6, pp. 261-262, « Neque enim id magni refert, quanquam nolum illum omnes huius generis particulas tam minutim concisas in ordines referre, verum eas duntaxat quæ videantur frequenter in dicendo vsu venire ».

らだ。『弁論術（レトリック）の要素 *Elementa rhetorices*』において各見出し語の背後にある学問体系をきちんと理解することを強調したのち、メランヒトンはあらためて「ロキ・コムーネス」の方法を説明する。それはエラスムスのいい加減さとは対極にあるものだ。

少なくとも、思想を収集するのに何かしらの方法を用いることが必要である。というのも、よく整えられた見出し語に思想を配列すれば、それは記憶力の助けになり、そうした主題の配列が秩序を示すからである。事実、そのように知的な配列がなされた部分に、主題の規則やその出発点と繋がりが見られるのである。ところで、学問別に分割した場合にこそ、配列の体系は素晴らしいものになるだろう。それゆえ気を付けなくてはならないのが、学問を混同することであり、神学に関するものと哲学に関するものとをよく観察して分けなくてはならない。たとえば、哲学に関する見出しは、人間、理性、学問、思慮、徳、性向、習慣（中略）法、戦争、平和などが挙げられる。このように区分するのは容易であり、どの思想が、その範例が、どんな類似物が、どの区分に配置されるべきなのかもすぐにわかるだろう⁽²⁸⁾。

(Cæterum ad colligendas sententias etiam adhibenda est ratio quædam. Nam et memoria adiuuabitur, cum ordine distribuerimus eas in certas classes, et hæc distributio rerum inter se ordinem ostendet. Est autem et hæc quædam pars eruditionis, rerum ordinem, initia et progressionem videre. Optima autem in distribuendo œconomia erit, si sequemur artium discrimina. Cavendum est enim, ne confundantur artes, sed observandum, qui loci sint thelogici, qui sint philosophici. Ac philosophici possunt peti ex partibus hominis, ratio, artes, prudentis, virtus, affectus, consuetudo...lex, bellum, pax. Facile est autem genera parti, et videre, quæ sententiæ, quæ exempla, quæ similitudines, in qualibet specie collocari debeant.)

メランヒトンが強調し、かつエラスムスに不足しているのは、集めたものをどのように上手く整理し、配置するかについての「判断 *judicium*」にほかならない。すでにクインティリアヌスがその危険性を指摘したように、豊富に集められた情報は、配置によって秩序づけられないかぎり、単なる積み重ねられた塊に墮するからだ⁽²⁹⁾。この点については、エラスムスも意識的であるが、いかんせん彼の場合は無造作というかい加減である。

「気前のよさ *liberalitas*」という見出し語を例にあげるとすれば、そこから、即時に与えら

(28) Melancthon, *Elementa rhetorices*, in *CR*, vol. xiii, col. 453-454.

(29) Quintilien, *Institutio oratoria*, VII, pro. 1, « [...] abundans rerum copia cumulum tantum habeat atque congestum, nisi illas eadem dispositio in ordinem digestas [...] ».

れる施し、適切な施し、ふさわしい人に対する施しとそれがふさわしくないところに集められること、非難に値する施し、相互的な施しというように下位区分に分け、数え上げられるだろう⁽³⁰⁾。

(Liberalitatis titulum, vt exempli causa loquamur, ita licebit partiri, si subieceris : 'Beneficium prompte citoque datum' ; 'Beneficium aptum' ; 'Beneficium digno aut indigno collatum' ; 'Beneficium exprobratum' ; 'Beneficium mutuum').

こうした整理は何かしらの規則に基づいているわけではなく、エラスムス自身の経験から導きだされたものだ。これに対してメランヒトンは、すでに上で確認したように、規則的な秩序を求める。それは例えば学問別の樹形図であり、神学、哲学、法学、歴史学、医学というようにカテゴリという基準に基づいて区分されたものだ⁽³¹⁾。

この両者の差異について F. Goyet はキケロ『トピカ』第28節以下で述べられている「列挙 *partitio*」と「区分 *divisio*」による定義の方法を参照しながら、分析を行なっている。前者は「呈示された対象を構成部分に分けるようにして定義する」方法であり、後者は「定義されるものの類に属するすべての種を包含するように定義する」方法であるが⁽³²⁾、これをエラスムスとメランヒトンに当てはめると、エラスムスは上の引用部分のように「気前のよさ」という対象からそれらを構成する、経験的に考えられる限りの「施し」を「列挙」している。それに対して、メランヒトンの「ロキ・コムーネス」においては、それが「哲学」という見出しであれば、そこに属するもの（人間、理性、学問、思慮、徳など）へと区分される。エラスムスの方法はまさしく彼が理想として掲げる「豊かさ」を実現するのに適したものであるといえよう。なぜなら、「列挙 *partitio*」はその構成部分つまり下位区分を理論上、無制限に増やすことが可能だからだ。「気前のよさ」という見出し語に関連するものであれば、思いつくかぎり無限に下位区分として数え上げる (*ita licebit partiri*) ことができるのだ。それに対して「区分 *divisio*」は設定した「類 *forma*」に含まれる種だけに制限される⁽³³⁾。つまり「哲学」という類にはある程度決まったものしか配列されないうえ、そこに神学に関するもの、たとえば「敬虔さ」などは含まれないだろう。メランヒトンもこうした「類」を混同することがないように注意を促しているが、それは「区分」

(30) Érasme, *De copia*, ASD I-6, p. 260.

(31) メランヒトンから見たエラスムス *De copia* への批判点については、F. Goyet, *op. cit.*, pp. 557-566, 'Critique de la méthode du *De copia*' を参照のこと。

(32) Cicéron, *Topiques*, sec. 28, « partitionum, cum res ea quae proposita est quasi in membra discerpitur [...] » ; « Divisionum autem definitio formas omnis complectitur quae sub eo genere sunt quod definitur. »

(33) Cf. *Ibid.*, sec 33, « Formarum enim certus est numerus quæ cuique generi subiciantur; partium distributio sæpe est infinitior, tamquam rivorum a fonte diductio ». 「というのもそれぞれの類 (*genus*) に属する種 (*forma*) の数は確定しているのに対し、部分の列挙 (*partitio*) は、泉から水が流れ出るように、しばしば限りがないことがあるからである」。

の方法に従っているからであり、無制限に事柄を増やしてしまわないようにするためなのだ。

こうした二人の特徴をよく理解するために、イメージを借りて表してみよう⁽³⁴⁾。エラスムスは——彼自身もしばしばこのイメージを使うように——花々のあいだを飛び回り、蜜を集める蜜蜂 (l'abeille) に喩えられるだろう。その花畑は蜜蜂が飛んでいける限り無限に広がっている。そこから収集したものを自分の巣へと持ち帰るが、蜜蜂はそれらを整理することはなく、経験則に基づいた仕方では分けるのみである。彼によって重要なのは、それらが「多彩」であるかどうか、あるいは「豊か」になったかどうかである。この蜜蜂は蜜を集めることには熱心であるが、それらをどこに配置するか「判断」にはそれほど重点を置いていないようだ。

他方、メランヒトンは一本の樹木のうえを走り回るリス (l'écureuil) に喩えられるだろう。樹木はこの現実世界を表しており、分岐した枝の一つ一つが学問知識に相当するだろう。リスはその枝を伝って葉の方へ向かえば、一つの類型に含まれる具体的な事象の数々を目にすることになるし、反対に幹の方へ向かえば、数々の事柄が一般性に還元された形、普遍的な概念へと導かれるだろう。そのように幹から枝先へ、枝先から幹へと走り回りながら、最終的には木全体を把握する。この場合「ロキ・コムーネス」は、枝と幹のあいだにある方向指示器のような役割を果たすだろう。それぞれの枝が何の分野を表しているのかを、一般性の形で教え、その枝先へと導くのである。したがって、リスは無邪気に走り回るといよりは、一步一步方向を確かめながら、つまりその「判断」を行使しつつ進む。これがエラスムスとメランヒトンの差異である。

4. 言論の目的の変化：*movere* と *docere*

キケロの弁論においては『発想論』第二巻 (48-50) において述べられているように、ロキ・コムーネスは明白な事実の増幅と疑いのある論点の拡充に用いられる。それは弁論をより説得的にするものであり、『弁論家について』(III, 106) で改めて取り上げられるように、とりわけ演示弁論における悪徳の非難の際に最大の効果を発揮する。ロキ・コムーネスは聴衆のあいだに「憤激 indignatio」を引き起こし、人々の「心を動かす *movere*」によって説得を作り出すのだ。また、法廷弁論の構成のなかでは、結論部がロキ・コムーネスに向いている。というのも、そこではそこまで述べられてきた論証の論点の確認が行われ、その後被告に対する「憤激」もしくは原告に対する「憐憫 miseratio」が行われるからだ。この際、特徴的なのが、原告や被告といった個人が断罪や弁護の対象になるのではなく、より一般的な価値が対象になるということだ。たとえば犯罪それ自体への憎しみを煽ったり、ローマという国家それ自体の威厳を擁護したりなどである。つまりここで用いられるロキ・コムーネスは、個別的事件を一般的事象へと高める役割を果たしているといえる⁽³⁵⁾。弁論家は問題を一般化することにより、人々の感情に訴えかけ

(34) Goyet, *op. cit.*, p. 557.

(movere)、説得を成功させるのである。

他方、説得のための手段として「教示 docere」を挙げることでもある。キケロにとってこれは、法廷弁論において叙述 (narratio)、反証 (refutatio)、確証 (confirmatio) の一連のプロセスを指す。つまり、事実を確かめ、推論の誤りや欠落を指摘することで、判事に係争がどのようなものか「教示」することである。この方法の有効性を認めてはいるが、キケロにとって最上位の効力を持つのはやはり「感情への訴えかけ (movere)」である⁽³⁶⁾。

これに対してルネサンスの「ロキ・コムーネス」、特にメランヒトンの体系においては、どのような役割を果たすだろうか。すでに見たようにそれは「見出し語」を意味し、学問体系の一部門を指す。また、具体的な事柄(種)をまとめる「類型(タイプ)」でもある。つまり、見出し語は事柄の一般性を表すといえる。格言であれ、範例であれ、具体的な事柄を収集し、整理し、見出し語へ配列する作業は、個別から一般へと進むプロセスを意味している。メランヒトンは次のように断言する。「(議論を) 増強するための主要かつ本質的な方法とは、仮説 (hypothesis) から一般命題 (thesis) への移行、すなわち個々の事例 (ケース) から「ロキ・コムーネス」すなわち見出し語への移行である⁽³⁷⁾」。キケロにおいて論点の増幅拡充を意味した「ロキ・コムーネス」とメランヒトンの見出し語としてのそれは、意味においては異なるが、個別的論点を一般化しようという意志においては一致するのが見て取れる。

つまり、「ロキ・コムーネス」はキケロにおいても、メランヒトンにおいても同じ役割を果たしているのだ。それは個々の事象を超えた「大原則」への訴えかけである。キケロにとってそれはローマ共和政 (civitas) であり、メランヒトンにとっては自然の深層構造を意味する。殺人であれ、陰謀であれそれが国家に対するものであれば、「憤激 indignatio」は最大限に高められ、聴衆の感情を憎しみへと一変させることができる。他方、見出し語のなかに配列された範例や描写も、それらが根本的に世界の秩序体系のなかに包含されるものであれば、真実としての価値を持ち、大きな説得力を持つ。

しかしながら、聴衆を前にしたキケロの雄弁はもはやルネサンスでは通用しない。メランヒトンは「憤激」とそれによる説得 (movere) を求めないからだ⁽³⁸⁾。彼にとっては感情よりも理性

(35) また『弁論家』においても「ロキ・コムーネス」による言論の増幅拡充と主題の一般化について語られている。Cf. *Orator*, XIV, 45 et XXXVI, 126.

(36) Cf. *De oratore*, II, 214-215, « qui aut breviter aut summis dicunt, docere iudicem possunt, commovere non possunt; in quo sunt omnia », 「簡潔で冷静に話す者は判事に教示できても、その心を動かすことはできない。しかし、すべてはそこに懸かっている」(強調引用者)。

(37) Melanchthon, *Elementa rhetorices*, in *CR*, vol. xiii, col. 480, « Est autem hæc prima et præcipua augendi ratio, transferre hypothesin ad thesin, hoc est transferre causam ad locum communem ».

(38) メランヒトンは、弁論の結論部に関してキケロの見解を踏襲し、被告は自身に対する「憐憫 misericorde」を求め、原告側は憎しみを駆り立てると述べているが、そこに積極的な意味付けをせず、むしろ追従者もこうした術を難なく使うと指摘して、否定的な見解を打ち出している。*Ibid.*, col. 435-436.

が優位を占め、それによって秩序を保つことが最重要である。ここでキケロ的な論点の確認である「教示 *docere*」が別の意味、より積極的な意味を持つようになる。それは学問の「教理 *doctrine*」を教え、現実の「真実 *verité*」、さらに信仰の「真理 *Veritas*」へと読者を教導することである (*docere*)⁽³⁹⁾。

ここまでの議論をまとめると、「ロキ・コムーネス」は個別 (*hypothesis*) から一般 (*thesis*) へと議論を移行させることによって、大原則へと訴えかける。これを利用してキケロは聴衆の感情を動かし、説得へと至る。それに対し、メランヒトンは読者に真実や真理を納得させる。キケロの増幅拡充のための「ロキ・コムーネス」が時を経てルネサンスに伝えられ、それに伴いこのような « *movere* » から « *docere* » への変化が起きたことは、レトリックの歴史においては重大な出来事だといえるだろう。

エラスムスはラテン語を効率よく読み、身に着ける方法を示した。彼が重視する「多彩さ」や「豊かさ」はそうした方法を支える概念であり、同時に目指すべき目標でもあった。このような新たな教育方法が導入されると、学問理解の様相も変化を蒙る。メランヒトンは深遠な学問、特に神学に対してどのようにアクセスするか、その方法論を「ロキ・コムーネス」という概念を再発見することで理論化し、現実世界全体の把握へと適用した。ところで、印刷術の発展によるテキスト情報の増加を利用して、エラスムスは、蜜蜂のように情報の収集、保存、消化することを推奨したが、そうした膨大な情報を前にしてメランヒトンは不安を覚え、なんとかしてこれを統御し、把握しようと試みた。たしかに「豊かさ」は価値あるものであるが、秩序もなく、管理もされなければ、それは嫌悪すべき寄せ集めでしかない。メランヒトンの不安と「豊かさ」の統御は、のちに「コモンプレイスブック」において現実化し、最終的には百科全書へと姿を変えるだろう⁽⁴⁰⁾。

一方では情報管理のための見出し語として機能している「ロキ・コムーネス」は、その一般性ゆえに説得のために用いることができるだろう。かつて聴衆の感情を刺激するために用いられた

(39) アグリコラ、メランヒトンにおいて « *docere* » に積極的な意味付けがなされ、キケロ的な « *movere* » が顧みられなくなる変化については次の論文。F. Goyet, « La métamorphose du *docere* chez Agricola et Melanchthon », in *Rhetoric-Rhétoriciens-Rederijkers*, eds., J. Koopmans, M. A. Meadow, K. Meerhoff and M. Spies, Amsterdam, Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences, 1995, pp. 53-65。

(40) コモンプレイスブックや辞書などの参照用の書籍から「百科事典 *Encyclopedia*」への移行については A. Moss, *op. cit.*, pp. 195-197; A. Blair, *op. cit.*, pp. 168-172, pp. 256-264; J. Céard, « Encyclopédie et Encyclopédisme à la Renaissance », in *L'Encyclopédisme*, *op. cit.*, pp. 56-67. また H. Hotson, *Commonplace Learning: Ramism and its German Ramification, 1543-1630*, Oxford University Press, 2007, 特に pp. 169-224 も参照のこと。

のとは異なり、いまや偉大な真理を教えることが求められている。「ロキ・コムーネス」はこうして雄弁から教育へと、群衆の前から机の前へと移行する。